

これから生活者が求める 「なつかしい未来」



小黒 一三
Kazumi Oguro
月刊ソトコト 編集長



濱 恵介
Keisuke Hama
大阪ガス エネルギー・文化研究所
研究主幹

本誌七四号でもお伝えしたように、大阪ガス エネルギー・文化研究所では、二〇〇五年はじめに、全国の千人を超える方々を対象として「生活意識調査」を行った。そして、その調査結果を受けて前号では、『住まいと生活』に関する調査結果を中心に、その実態紹介と分析結果などを掲載した。

それに引き続き今号では、『環境』と『エネルギー』をキーワードにした調査結果に関して、所員の報告を掲載している。

今回の対談は、『環境』や『ライフスタイル』に関して、日本で初めての環境ファッションマガジン「月刊ソトコト」を発行し、また最近、色々なメディアで取り上げられるようになった「ロハス」(※1)の発信元である小黒一三編集長を訪ね、生活者と環境の関わり方の課題と未来像についてお話をうかがった。

ケニアにホテルを造ったことで
環境問題への関心が芽生えた

濱 初めてお目にかかりますが、実は私の住まいが四年前の「ソトコト」に取り上げられたことがあります。エコ住宅特集号でした。大阪ガスの

エネルギー・文化研究所では、『家庭におけるエネルギー』、『住まい・生活』、『都市』の四つの領域で文化的な視点をからめた研究をしています。住まい・生活研究の一環として、大阪で「ロハス研究会」に参加している所員から、小黒さんにお話をうかがったら面白いのでは」という提案があり、お邪魔させていただきました。まず、小黒さんがどのような経緯でこの分野に入られたのか、お話を聞かせてください。

小黒 僕は、学生時代から雑誌の編集をしていました。その縁でマガジ

ンハウス社に入社し、最初は『BRUTUS』という、ニューヨークを重点取材地域にした、世界の最先端の情報を紹介する雑誌の編集に携わりました。その後、いくつかの雑誌編集を経て、最後には『ガリバー』という旅行雑誌を出したのですが、その時には、既に北半球の先進国は全部回っていたこともあり、土埃のする南米やアフリカなどに惹かれるようになりました。

濱 ニューヨークなどは全く対照的な地域ですね。

小黒 そのきっかけになったのは、ニューヨークに住んでいるセレブたちを訪ねたとき、彼らは幼い時に親父につれていかれた旅行のアルバムだとかいって、「ブータンの思い出の写真だよ」、「アマゾンへ行った時の写真だ」などと写真を見せてくれるのですが、白人の人たちって、小さなころからこんなワイルドなところにつれてもらっているんだ」と思ってお洒落な旅先としてアフリカへの関わりが始まりました。

濱 最初から環境に関心があったわけではないのですね。私の場合も外国での体験が刺激になりました。若いころオーストラリアとフランスに住み、ヨーロッパ系の文明と豊かな生活スタイルに触れたあと、インドネシアで暮らした体験が地球環境問題や南北問題について目覚めさせてくれたと思います。

小黒 僕は、ケニアの国立公園の中にホテルを造ったのですが、それだけを聞くと僕が動物を好きだと思っただけです。しかし決して動物が好きだったのではなく、欧米のセレブに憧れてやっただけなんです(笑)。世界の最先端の人たちが、アフリカみたいなところで、これがすごい、ハイセンスだ」と思うような感性こそが、実はクリエイティブとして豊かなことなんだと思っただけです。ところが、「ミイラとりがミイラになった」ではないですが、確かにアフリカってすごいな」と思うようになった。アフリカのホテルを造ったことで、それまで追っかけていた白人の人たちとの考え方の違いを、環境問題を通して初めて知りました。

濱 ケニアの国立公園とはどんなところでしょう。サバンナに野生動物がいろいろ居て、精悍なマサイ族が暮らしているとか。

小黒 本来、マサイ族は遊牧民族なので定住しません。ただ、今は国境を越えてはいけないということで、定住化を進められています。不思議です

が、定住すると彼等も農耕を始めます。そして、植えているニンジンなんかを象が食べに来ると、お母さんは怒って罾を振り回して追っ払う。それを見て、僕は、「おもしろいな、これが現実か」と思うのですが、白人の大金持ちたちは、「そんなのを見るために、アフリカまでわざわざやってきたわけじゃない」と怒って、そのマサイたちを、そこから追い出そうとするわけです。観光客の商売にならないからです。日本では考えられない。

濱 憧れのイメージがあって、それを実感したくてそこを訪れるわけですから、マサイが畑を耕すところなど見たくないのでしょうか。

小黒 そうです。で、それを機会に、日本人的なものの見方について考えるようになって、次第に環境問題にも関心を持つようになりました。

「食」を大切にしたい思いから スローフード運動を展開

濱 欧米人的な視点と日本人のものの見方は何が違うのでしょうか。「全てはうつろいゆく」とか、状況が変われば判断基準も違ってくる」というような観念が我々にはあります。小黒さんのお話にそのような背景の違いを感じます。

小黒 日本人が環境嫌いなのは、最初に入ってきたエコロジストたちが、やみくもに「鯨を食べちゃいけない」とか唱えたので、それに対する嫌悪感が生まれてしまって、なんとなく環境を考えることがネガティブなことだという考えが植え付けられてしまったからだと思うんです。「マサイが増えちゃって、動物がいなくなってしまうのがねえじゃないか」と現に暮らしている人たちの味方というか、現地の考え方になります。これは日本人的な考え方なんだと感じました。現実、マサイは自転車には乗りますし、テレビも見ただけ。それを止めようとしているのが、彼等なわけです。

濱 ある魅力的な文明にいったん接したら、それを止めることはまず不可能ですね。我々も古くから大陸の文明に強く影響を受け、近代化も

西洋文明の受け入れを意味しましたから。

小黒 行き詰まっているのはキリスト教社会であって、アジア的な心、仏教思想を持っている人たちが環境問題を考えていくのと、何か違うのではないかと思います。新聞報道などで見る環境問題には、解決がない」といつか、日本人にはとても理解しがたい問題と認識され、前向きに取り組めないのではないかと思います。そこで、僕なりの解釈で環境雑誌を始めたわけです。昔、スティングというミュージシャンが、「アマゾンの熱帯雨林を守ろう」とか、「インディオが住む森を守ろう」と言っていたのですが、やっていることは、ただのロックコンサートでした。しかし、そういうふうに言う方がカッコいいわけです。

濱 ところで今、世間では、小黒さんたちが提唱した『ロハス』がトレンドになっていますが、その先鞭とも言えるべき、スローフードやスローライフも、こちらが紹介されたと聞いています。

小黒 実は、「スローフード運動」の本質は食のことではありません。人間にとって食べることは最大の快楽であって、その快楽を「ファストフードに渡すのか」、「食の時間は好きな仲間と時間をかけておいしいものを食べることが人間にとっての基本の権利だ。それを、ファストフードに渡してしまっているのか」という運動だったんです。今、提唱しているロハスも、昔はダイエーの亡くなった中内さんのように、「消費者がお金を使う王様だ。だから彼らが価格を決める」。つまり、安くてもいいものを買うことが快楽だったわけです。「賢い消費者だ」ところがバブルになり、ちょっとお金持ちの気分を味わいたくなって、「自分へのご褒美」という言葉があるように、にわか金持ちみたいなフリをすることが快楽になってしまい、それにお金を使った。ところがバブルが弾けて、「すべてが豪華にはいかないんだ」と反省し、その後におきたのが、「デパ地下」などの一点豪華主義にお金を使うブームです。つまり、高くてもいいから納得いく買い物したいと考えるようになった。ロハスはまさにそれだと思います。値段は少々高くても環境にいいもの、自分なりに納得したものを買うことが快楽なんじゃないかと問いかけたわけです。

人類がいなくなっても 地球は宇宙を漂い続ける

濱 私が折りにふれ思うのは、自分を守る、快楽を追求する、さらに自己実現などという欲求の充足こそが人間を行動させる動機だということです。自分の中にある問題意識としては、個人の欲求をとことん充足させようとする場合、それも先進国の、一部のリッチ層だけのニーズ充足だけだったら問題は小さいのですが、これから世界の六〇億以上の人が、それぞれの先進国流の快楽を追求したらどうなるか。このような個々の欲求の膨大な総和を地球は支えきれなくなるわけがありません。その心配ないし問題についてはいかがお考えですか？

小黒 僕はね、異常な楽観主義者なんです（笑）。二酸化炭素やフロンが増えたから地球が温暖化してきたという話を僕は信じていません。そんなことより、地球の温暖化と寒冷化のリズムの方で説明された方が、自分としては分かりやすいからです。地球というスケールと、人間の欲望が膨らんで総和は地球が支えきれない。それは人間と地球を同じ地平で比べているわけで、本来は比較の対象にすらならなかったものはずですから。

濱 地球が与えるものであり、我々がそれを食い尽くすもの、という関係だと考えるとどうですか。

小黒 地球にとって人間なんてものは、数は増えたかもしれないけど、いつまでたってもちっぽけな存在で、もつと他に考えないといけない要素が一杯あるのではないのでしょうか。

濱 確かに、人類が減びても地球は同じように存在すると思いますが、私は人類が自分のせいで滅びることは何としても避けたい。

小黒 環境は、今とは変わってしまったいるかもしれないですね。人類だけがなくなっても、地球は今と変わらず、静かに宇宙を漂っている。誰かが言った「人間は狂った猿」だというのは正しいと思います。

濱 そうですね。異常な繁栄ぶりです。

小黒 もともと狂っちゃった動物ですから。僕は諦念というか諦めというか、とにかく、仕方のないことだと思っています。「ソトコト」の表紙の右下には、猿が笑っている姿が描かれていますが、それは人間が猿よりも愚かであるという意味を込めています。

濱 あと五〇年後くらい先には、人間と社会はどういうふうになっていると思いますか？

小黒 人口調整が行われるようになっていないんですか。

濱 かなり過激な話になりましたけれど、私の考えは少し違って、やむをえず起きる地震などの悲劇もあるけれど、環境破壊による悲劇は避けたい。自分の納得する暮らしをしながら、「足るを知る」とかの概念で、ある程度抑えられるような仕組みが働けば、消費は減って満足度は上がる、そういうストーリー期待しているわけです。

小黒 言い方が悪いのですが、僕が言いたいことは、人間が見えていることって、すごく小さいことなんじゃないかということです。だから、世間の人が言うことを信用していません。

濱 確かに個人が実感できる範囲は狭いですね。しかし、我々は情報や理性的な判断力も獲得したわけだから何とかならないのか。人類の行動は生物が誕生して以来、食べ物にありつき、子孫を残し、相手を倒してでも自分が生き残るといったことが一番本質的だったわけですから、その原理は否定できません。けれども、地球は無限ではなくて有限だというのは分かったので、その中で生きていくには、自己調整作用がないと自分自身を不幸にする、快楽追求なり、欲求充足なりの目的が果たせなくなるという自己矛盾に陥っているわけです。

環境問題の解決のために 「日本発」のルールを提唱するべき

小黒 僕たちは、お調子もんですから、この前、坂本龍一さんのコンサート、シンポジウムで、ナットソースというロンドンの二酸化炭素排出権



当に大丈夫なのか、信じられるのかなと思ってしまいました。

濱 そういうお金が動くことで、石炭を燃やしていたのを天然ガスにするとか、さらには風力・バイオマスなど再生可能エネルギーを普及させるのを援助するための財源になる、と理解したらよいと思います。

小黒 僕は別に、そうした運動を批判しているわけではありません。ただ、あてにならないものを金銭的な価値に置き換えて、グローバルスタンダードでやる。こういうものは、音楽やファッションが好きな子どもたちに早く知らせて、採り入れていった方がいいと思います。関心を持たせて。

濱 色々な仕掛けを通じて、関心呼び起こす。それを通じて捉え難い環境問題を身近に感じられればよいですね。

小黒 ただし大人としては、「そんなの、当てにならないぞ。当てにならないけど、これはルールなんだ」と教える必要もあると思っています。

濱 高くてもグリーンエネルギーを使うことには大きく二つ意味があって、一つは、うちのグループはグリーン電気を使っています」と一つのブランドになるわけですね。PR効果がある。もう一つは自己満足、「僕

取引の東京事務所から排出権を買ったわけですね。「どういう排出権か」と見たら、ハンガリーの火力発電所の排出権でした。それは火力発電する時、ガスエネルギーではなく木を燃料に使ったら、これだけ減るという証明でした。それをお金にして我々が買っている。それは二酸化炭素一トン当たり五〇〇円でしたが、それで四大家族が半間に出す排出権になる。旧共産圏だったから安かったらしい。証書には書いてあるのですが、そんなもので、本

はいいいことをしている。そういうのは大事だと思うんです。グリーンにお金を払うことでブランド価値が高まれば、お客さんも増える。自分の欲求も満たされる。僕が解こうとしているパズルの解き方のひとつは、環境価値をお金に置き換えて流通させることにありそうです。

小黒 単純な話ですが、それが一番わかりやすいですね。

濱 環境に悪いことには税金をかける、良いことにはそれを財源とした支援が回っていくというのと同じような方法だと思います。

小黒 「日本発」のルールをつくってしまえばいいんです。

濱 「日本発」のね。考えてみると、環境にまつわる話は多くが海外発ですからね。日本発ですぐ思いつくのは、日本の食文化のすばらしさです。長年にわたって、穀類と野菜類が中心で、タンパク質も大豆や魚から取っていましたから。まさに健康的で持続可能です。トーフ、納豆、寿司などは既に国際化しています。

小黒 僕は、ロハスは通過点だと思っています。ロハスというライフスタイル意識を得て、これから日本の生活者はどこにいくのか、そこに興味があります。

「なつかしい未来」の実現が 地球環境を救う

小黒 最近気になるのですが、「なつかしい未来」という言葉が、次の流行り言葉になるのではないかと直感で感じています。たまたま読んだ名古屋のある人の本に、「懐かしい未来」と書いてあったのを見て、「これだ！」と思いました。

濱 その方は、津端修一（一）さんですね。ご自分で手がけた高蔵寺ニュータウンに奥様と住み、畑と雑木林のある素敵なお住まいでエコライフを実践されている。私にとって住宅公団の大先輩でもあります。

小黒 その本には、「懐かしい未来に向けて僕たちは歩んでいく」という。六本木ヒルズというのは「来たるべき未来」なんです。『鉄腕アト

ム』とかマンガの世界、少年雑誌は、ああいうのが二一世紀の未来だった。そして来たるべき未来は来ちゃった。しかし、いざ来てみて、その中でウロウロしてみても全然ワクワクしないんですね。では何が一番ほしいんだろう、と考えてみると、昭和のぬくもりを感じる町並みとかになると思います。この事務所の川向こうには、もんじゃ焼きで有名な月島がありますが、もんじゃ焼きが流行っているのではなく、昔の日本に代表されるような町並みや狭い路地、薄汚い横丁があつて、あれが今の小・中学生や高校生たちはなんだかうれしくなるらしいですよ。

濱 中高生の人気スポットになっているんですか。もんじゃ焼きを食べにいくわけじゃなくて？

小黒 僕は暇な時に、よく月島に行くのですが、若い女の子たちが、うろろして町並みを楽しんでいる。「こういうのいいよね」とか言って。潜在的に日本人は農耕民、村民だから、ああいう暮らし、縮みの文化とか知らなくても懐かしく感じるんでしょうね。直感的に。

濱 公団にいた頃、千葉で開かれた緑化フェアに、エコステーションがあるが「公団パビリオン」を作ったことがあります。木造に漆喰壁、屋根には草が載っている。若い子たちが「カワイイ」と気に入ってくれました。彼らにとっては珍しいけれど直感的に受け入れやすかったのでしょう。自分の感性に素直な状況をつくることはハッピーだし、かつ環境にもいいことです。それが二つ合うところを世の中に増やしていけば、未来が開けるかなと。小黒さんは楽観主義だと言い、私はかなり真面目に考える方だから、何とか幸せと環境にいいところが重なりあう要素をあちこちにちらばせたら、ちょうどいい具合になるかもしれません。あるデータによれば、日本のエネルギー消費を四分の一にするには、昭和三〇年代後半くらい、四〇年前に戻ればできるそうです。当時を思い返せば、ちゃんと電車で走っていたし、自家用車は各戸にはないけれど車は使われていた。四〇年前の生活レベルはそんなに悪くはなかったですから。

小黒 僕は「日本国」という枠組みでは何も考えていません。実際に若い人たちは、もはや国家なんて考えていないし、国も選べる時代にもなっていますから。

小黒 一三(おぐろ・かずみ)

「月刊ソトコト」編集長

1950年東京生まれ。(株)マガジンハウス在籍中、雑誌「ブルータス」「ガリバー」他の編集を担当。90年マガジンハウスを退職後、トド・プレス設立。92年、ケニアに自らが手がけたアフリカ人アーティスト、ムバタの名をとって、ムバタ・サファリ・クラブを開設。テレビでは「ワーズワースの庭」、「メトロポリタン・ジャーニー」、出版物では「中田語録」の編集、「スガシカオ1095」の出版などを手がける。99年世界初の環境ファッションマガジン「ソトコト」を発刊し現在に至る。

濱 恵介(はま・けいすけ)

大阪ガス エネルギー・文化研究所
研究主幹

1968年東京大学工学部都市工学科卒業後、日本住宅公団～住宅・都市整備公団で都市住宅建設・住環境整備に携わる。98年から現職。2004年から大阪大学大学院客員教授。研究領域は、環境と共生する住まい・街づくり。著作は『住・空・環 - 住宅・都市空間・環境に関する私論集 - 』(CEL)、『わが家をエコ住宅に - 環境に配慮した住宅改修と暮らし - 』(学芸出版社)など。



濱 地球問題は一人ひとりの活動の総集積ですよね。一人ひとりがわきまえて行動すれば、全体としてもおさまりがつくのではないかと思います希望がある。その一方で、我々の遺伝子はより快適に、うまいものを食って、子孫が増えるように指図している。自分を犠牲にするのは本能にないものだから、その先はトータルがパンクする恐れがあるの、国の管理ではなく、地球が一つの判断単位になってくる。しかし、グローバルイズムが当然とばかり、個別に自立すべき領域まで超大国が仕切る、という嫌なパターンも見えてくるんですが。

小黒 そういった意味でも、既に述べたように、日本食も大事ですけど、日本的な文化を世界に広げることが大事なんじゃないかと思うわけです。

濱 我々の社会、文化をどう建て直していくかという話にならざるをえないですね。単にエネルギーとか資源の話、自然保護などの話だけじゃ

や済まない問題です。私たちが捨ててきた古臭いやり方の中に、本当の美しさ、豊かさがあったということなのでしょう。他の人に迷惑をかけない、将来の世代に『負の遺産』を残さないという意味での価値があるものを、もう一度取り戻す時代だろうと思います。そのためには、「なつかしい未来」を求めるのがよさそうだ、という結論に至りました。本日はお忙しいところ、有益なお話を色々とお聞かせ下さり、本当にありがとうございます。

(1)LOHAS(Lifestyle of Health and Sustainability)の頭文字をとった造語と書き、アメリカの社会学者ポール・レイ氏と心理学者シェリー・アンダーソン氏が提唱した。健康

や持続可能性を重視するライフスタイルを意味する言葉。

(2)自由時間評論家。昭和30年に発足した日本の住宅公団へ入所し、多摩平・前原高根台、赤羽台などの団地を設計、高蔵寺・ユータウンを計画。公団退社後、広島大学教授。本誌五八号に原稿も掲載。

CEL